

シベリア自然探訪紀行

第二部

森の恵みと動物たち

〈続編〉

自然案内人 井上信夫



▲タイガの中を流れるチュケン川
両岸にはうっそうとした密林が広がる。

九月十一日、私たちは再びハバロフスクの地に降り立った。期待に反して天候は雨、気温八℃と肌寒い。着陸前に雲の下で見渡した周辺の川は茶色に濁っており、相当な降雨があったことがうかがえる。

翌日、大型ヘリで目的地のチュケン川に向かう。六月の下見の際には、陸路七時間半もかかってたどり着いたホル川のベースキャンブを通り越し、その上流まで一気に飛ぶのである。その距離は直線で約一七五km、一時間そこそこのフライトである。

ハバロフスク国内空港を離陸したヘリは、

アムール川の上空を大きく旋回して南へ向かう。眼下には、広大な中州にゴマをまいたように小さなダーチャ（別荘）が散らばる。はるか川上に、大きく蛇行する二本の雄大な流れが合流しているのが見える。アムール本流とウスリー川だ。その間は中国領、ハバロフスクはまさに国境の町なのだ。

離陸して二〇分もすると森林地帯のまっただ中にさしかかり、やがて畑や道路は全く見えなくなる。眼下の平坦地には蛇行する小川や湿原が広がり、なだらかな山の斜面は丸い樹冠の広葉樹に埋め尽くされている。稜線付近の木々は、すでに黄色く色づき始めているが、その中にまばらに混じる黒みがかった針葉樹は、大部分チヨウセンゴヨウのようだ。

近の木々は、すでに黄色く色づき始めているが、その中にまばらに混じる黒みがかった針葉樹は、大部分チヨウセンゴヨウのようだ。

ここから千kmほど北の永久凍土地帯で見た針葉樹林は、上空から林床が見えるほどまば



上/アムール川の中州
小さなダーチャが散らばる

下/はるかに続く山並み
9月中旬、木々は色づき始めた

筆者

井上 信夫

昭和24年山形県飯豊町に生まれる。新潟大学理学部卒業、県内の教壇に立つが、かたわら魚類調査や子供たちの野外体験の指導にあたる。転職して、これらを本業とする。安塚町の世界少年冒険村のスタッフに加わる。

《連絡先》自然案内舎

ネイチャーワーク
新潟市寺山1丁目5-48
TEL025-270-2010



らであったが、眼下の森は植物で埋め尽くされている。植物の生育条件が良いため、高木層から低木層、草本層、そしてコケ層まで、幾重にも葉が展開されているからである。やがてへりは三ヶ月前に川下りをしたホル川の上空に達した。降り続いた雨で増水した川は赤褐色に濁り、水位は優に二mは上昇しているようだ。眼下の森の中で時折太陽の光がキラリと反射するのは、森が水浸しになっているからだ。それでも支流のチュケン川の水は、さすがに澄んでいる。間もなくへりは私たち一行を見覚えのある中州に降りし、爆音を轟かせながら視界から消えていった。

水の森、木々の川

この中州は六月に野営した同じ場所、一抱えもある太い流木の山もそのままだ。ただ、今回は水量が多いため、前回歩いて渡れた右岸の林に行くことができない。完全に離れ小島に閉じこめられた形だ。これからは地元のハンターが操縦する木造ボートが唯一の移動



上/チュケン川での一こま
次の目的地にむけて移動開始
下/釣り上げた魚もメニューに加える



ホル川河畔の猟師小屋

手段となる。翌日からボートで支川を巡り、改めて水の豊富さに驚かされた。川幅の狭まった峡谷では流れは集まって早瀬をなすが、少しでも平坦な部分では森の中に滔々^{とうとう}と流れ込んでいく。ボートの上から、明らかに川面の方が林床部よりも高いのが見て取れる。水は林床を水浸しにし、幾筋かの分流となって森の中を巡り、再び元の流れに合流していく。ここでは自然の摂理が全てを支配しており、川の流れを妨げるものは何もないのだ。

動物を育む森の恵み

厳しい冬をむかえようとするシベリアの秋は、豊かな実りの季節である。最も目を引いたのは、房状にたわわに実ったマツブサ科の真っ赤なレモニック(チョウセンゴミシ)である。六月には、木々からみつけた枝先に径一mmほどの淡黄白色



上/たわわに実ったレモニック
下/熟すと白くなるカラスナタクマの好物だ

の花をつけていたが、今は果実は完熟状態だ。川面を走るボートからも、陽当たりのいい河畔の木々の上で真っ赤な塊をなすこの実は、いやが上にも目につく。口に含めば、独特の酸味に混じってわずかな樹脂臭を感じる。熱いチャイ(紅茶)に一房入れれば、疲労回復の効は間違いない。

酸味のある赤い実をつけるユキノシタ科のフサスグリは、期待が外れてすでに盛りを過ぎ、ほとんど鳥や獣に食べられてしまっていた。長い柄の赤い小さなリンゴを鈴なりにつけたシピリスカヤ・ヤーブランヤ(シベリアのリンゴ)は、我が国ではエゾノコリンゴと呼ばれている。よく似たバイールカ(サンザシ)も同じバラ科で赤い実をつける。現地スタップがバケツ一杯ほど届けてくれた紅熱したコケモモは、日本の高山にも分布している地を這うようなツツジ科の小低木だ。

黒紫色の実をつける低木は、バラ科のチェリヨーム八(エゾノウワミズザクラ)である。近縁のチェリヨーム八・マーカは、樹高10mほどになるサクラの仲間である。その実はツキノワグマの好物と見えてよく枝が折られている。

白い実をつけるのは、ミズキ科のカラスナタク(シラタマミズキ)である。川べりに多い高さ一・五mほどの低木で、秋には紅葉

シベリア 自然探訪紀行

右/チョウセンゴヨウの松穂と種子

下/アイヌブキ

葉は細かく切れこむ。クマの食料になる



この植物は、樹高三十m、胸高直径一mを越す大高木となる五葉松の一種である。分布は朝鮮半島から中国東北部、ウスリー地方におよび、我が国では本州中部と四国の山中に点在している。新潟県内では苗場山の標高約千百〜二千mの高所に生育し、その分布域はさらに長野県・群馬県へと続いている。ずっと分布が広く数も多いキタゴヨウとは、樹皮の赤みが強く、針状の葉が六〜十二cmと二倍も長いことで区別できる。

チョウセンゴヨウの最大の特徴は、その巨大な種子である。長さ一〜五cmで小ぶりのピーナツほど、他のマツ類のように風で運ばれないから翼がない。油脂とタンパク質に富み、炒って食用としたり菓子材料とも

した葉の間に白い実がひときわ目立つ。我が国でも庭木として栽培されることがあるが、シベリアではクマの好物の一つだという。この他にもウスリーの森には、ヤマブドウやマタビ類など、動物たちの食糧となる実をつける様々な種類の植物が分布している。

動物の餌となる木の実には、中に種子を含む柔らかくて口当たりのいい漿果(ベリー)と、大きな種子そのものである堅果(ナッツ)とがある。これまで紹介してきた木の実はいわばデザートに当たる漿果の方であるが、堅果類は多量のごんぶんや脂肪を含む主食に当たる。ウスリーの森には、日本のオニグルミそっくりのマンシユウグルミや、ミズナラによく似たモンゴリナラ、ハシバミ類などがあるが、何と言っても現地地でケートルと呼ぶチョウセンゴヨウは重要である。



右上/アカガエルの仲間
川岸の各所に住んでいる



右/イボイボだらけのヒキガエル
上/マムシの幼蛇
斑紋は銭形ではなく帯状



短い滞在であったが、私たちは様々な動物

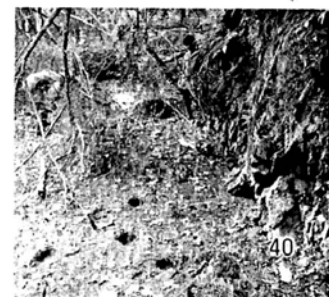
密林の動物たち

なる。ウスリー地方の人々にとっては、貴重な収入源になる樹木であるため、伐採は厳しく禁止されているという。

タイガに住む多くの動物たちにとっても、高力ロリーのこの種子は、越冬前の極めて大切な食物である。リスやモモンガ、ネズミの類はもちろん、大型獣のイノシシも落下したマツの実を好んで食べる。ツキノワグマは巧みによじ登って松穂をもぎ取り、木登りの不得手なヒグマは下で待ち受けるという。しかし、チョウセンゴヨウの結実には三〜四年の周期性があり、残念ながら今年には全く松穂を見つけることができなかった。

▼上/砂上に残されたアカシカの足跡

下/川岸の崖下に続くトラの足跡



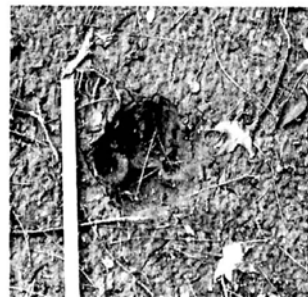
哺乳類では、樹上のキタリス、ホル川を泳いで渡るノロジカの雌を自撃した。その他の大型哺乳類に直接出会う機会はまだなく、足跡や爪痕などを見ただけが、それでも十分な感動を覚える。

タイガの植物に直接依存している大型獣の中でも、南北両系統の二種類のクマが分布している点が注目される。地元のハンターに聞くとクマ類の生息密度は五平方km当たり二〜三頭だというが、両種の割合については様々な答えが返ってくる。密林内にはツキノワグマが、草原や標高の高い場所にはヒグマが多いというのが真相のようである。

両種は姿形や色彩、習性も大きく異なっている。ツキノワグマは、漆黒の毛に喉元の白い月の環(中には全身黒色のものもある)がトレードマークである。植物食で、様々な木の実やアイヌブキなどの草を主食にしている。サクラやナラ類の木によじ登り、枝を次々に

に出合うことができた。アカガエルには頻繁に出くわし、九月にはヒキガエルも見た。ホル川のわきの乾いた岩場では、十数頭のマムシの子供を八匹も見た。六月にカルヤギン氏が遊んだ黄色いバンドの漆黒色の一・五mほどの蛇は、シュレンクナメラである。

哺乳類では、樹上のキタリス、ホル川を泳いで渡るノロジカの雌を自撃した。その他の大型哺乳類に直接出会う機会はまだなく、足跡や爪痕などを見ただけが、それでも十分な感動を覚える。



シベリアトラの足跡 中形のメス▶

折り曲げては実を食べ、尻の下に枝を敷いていく。その跡は円座とかクマタナ（熊棚）と呼ばれ、一見鳥の巣状の独特のシルエツトでかなり遠くからそれと分かる。ホル川河畔のグワシユギールからハバロフスクに向かう車道のわきでサクラの高木に残された円座を見た。円座は道に沿って延々と続き、何と四十以上を数えたのである。ツキノワグマは毛皮が良質で肉もうまいため、一時乱獲されて激減したという。その後は捕獲禁止となり、生息地のチヨウセンゴヨウの保護策などが功を奏して今では増加に転じているという。

一方ヒグマは二回りも大きく、前種に比べて前足の爪が細長いため、二才を越すとほとんど木に登ることができなくなるといふ。食性は、より肉食に偏り、川に溯上したサケ・マスからシカ類やイノシシまで捕食する。

ところで、ヒグマの中には、冬ごもりに必要な十分な脂肪を蓄えることができず、冬中腹を空かせてうろつき回るシャトゥーンと呼ばれる個体が現れることがあるという。イノシシやシカの足跡を追いか回り、時には強敵のトラをも襲うという。ハンターたちにとって

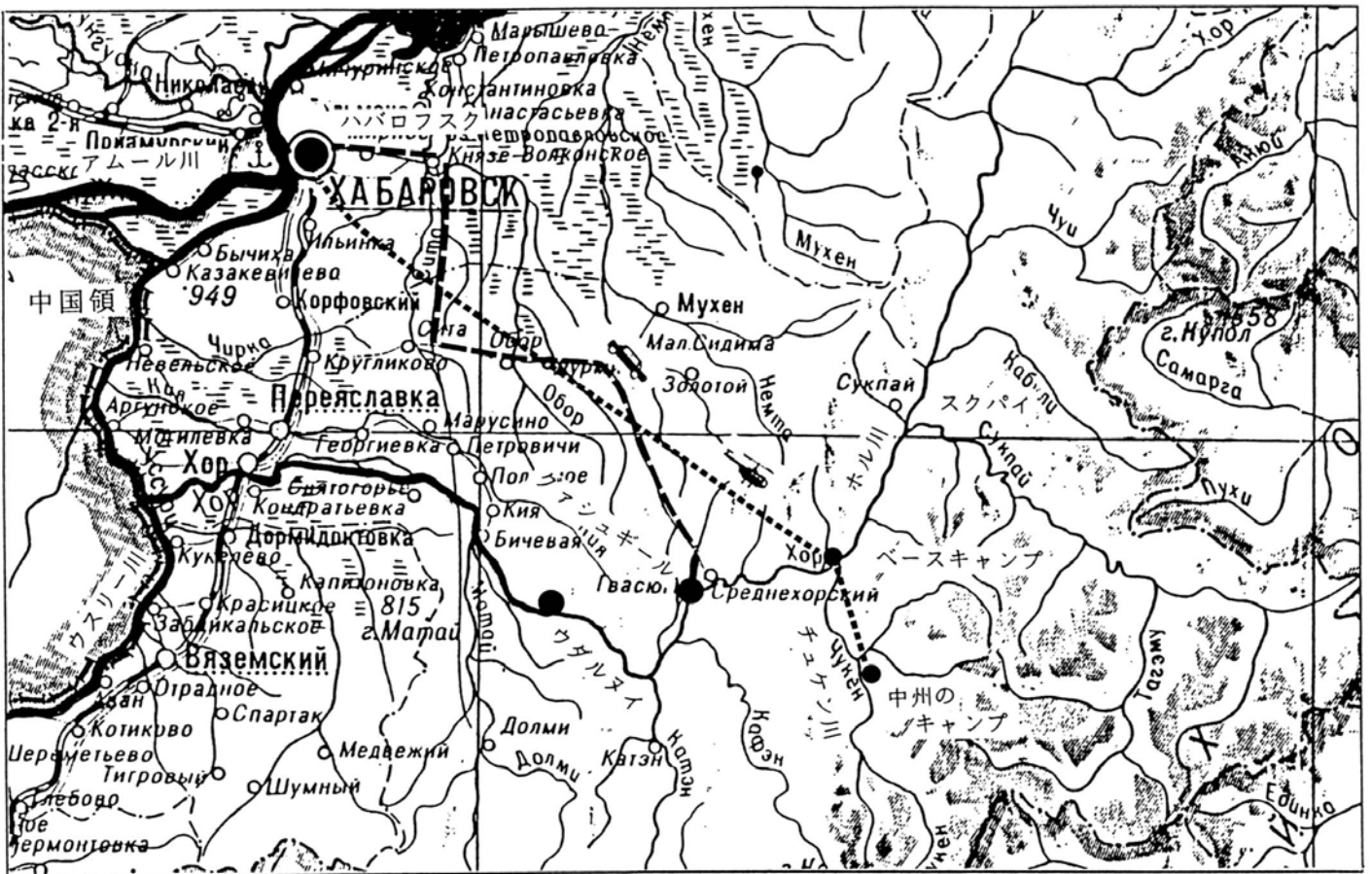
▼上/ツキノワグマの円座
サクラの枝の折りあと
下/ハンノキにつけられたヒグマの爪跡



も極めて危険な存在である。

ある年の冬、狩猟小屋に泊まり込んでいるウデへ族のハンターの猟場に、一頭の大きなシャトゥーンが現れ、若いトラを追跡したあげく食い殺してしまった。ハンターは、雪の上に残された跡で、その情景を正確に把握することができた。別な猟師小屋を訪れた彼は、何とそのヒグマが小屋に潜り込んでいるのを発見し、これを射殺した・・・。実際にグワシユギールの近くであった話である。

逆に大形のトラが、若いヒグマやツキノワグマを捕食するケースもあるという。美しいタイガの中で、動物たちの生存を賭けた闘いが日々展開されているのである。



シベリア・ネイチャリングツアー'95の行程図